

# 故人の尊厳とは… 家族の絆とは… 今こそ、真の葬儀の在り方を問う時代

群馬県で老舗といわれる葬儀社が46社を連ねた全国霊柩自動車協会群馬県支部。役員・理事を務めている6名が、自宅葬からホール葬へと変わりゆく群馬の葬祭事情から、葬儀スタイルの変化とともに、変わりゆく家族や社会との関係性を語ってくれました。近年、家族葬が主流になりつつあるなかで、故人を尊重するとは一体どういうことか。故人を供養して家族の絆を強くする儀式、「葬儀」とは。今日、明日、未来へと改めて「葬儀」の心と形をみつめ直す一石を投げかけてくれました。



## 出席者

群馬県葬祭霊柩事業協同組合  
全国霊柩自動車協会群馬支部  
(平成26年4月1日より「群馬県霊柩自動車協会」に名称変更)

林直男

理事長 (株)おにし堂 ●藤岡

諸田豊一

副理事長 (株)諸田葬祭総合ギフト ●昭和

柿沼尚孝

副理事長 (株)カキヤマ ●伊勢崎

清水則昭

会計 (株)えびし葬祭 ●高崎

羽曾部弘伸

書記 (株)あおば交通(メモリードグループ) ●前橋

赤石光裕

理事 (株)赤石三光堂 ●伊勢崎

## 今主流となりつつある 「家族葬」の実態

20年前の葬儀の改革を機に  
自宅葬から都市型ホール葬へ

**編集部** 群馬県の葬儀について、それぞれの専門的視点からお話をうかがいます。まず、皆様の会社のご紹介からお願いたします。

**林** 創業して約100年、現在の社長が4代目となる株式会社おにし堂です。葬祭業では早い時期にホールを設立しています。葬儀の施行や、花輪や仏具などの販売など葬儀に関する全般的業務を行っています。

**諸田** 沼田市や渋川市で葬儀や法事など葬祭関連行事や仏壇・仏具の販売もし



株式会社  
おにし堂  
取締役会長  
林 直男  
はやしただあ

ています。創業は昭和60年です。

**柿沼** 伊勢崎市で造花店として創立して90年の歴史があります。現在は、葬祭業、仏壇仏具、生花を主に販売しております。

**羽曾部** 弊社、あおば交通はメモリードグループです。メモリードグループは昭和44年に長崎市に設立され、婚葬、貸衣装、葬祭・ホテル・自動車販売など多岐事業展開をしています。あおば交通は昭和62年に創立して、前橋市で運送業務や自動車整備、霊柩車運送などの事業を行っています。

**赤石** 赤石三光堂は伊勢崎市境に昭和元年に創立されました。葬祭業や仏具・仏壇・墓石販売も行っています。自動車運送業、霊柩車運送事業を行っている関連会社があります。

**清水** 高崎市で創立46年を迎えるえびし葬祭です。総合葬祭プロデュースサービスと葬祭業全般、生花販売も行っています。

**編集部** 造花店など専門業社でスタートした会社やホール設立のバイオニア的な総合葬儀社さんと様々なバックボーンでのお話しが聞けますね。では、核家族化が進み、また家族の絆を見直すという



株式会社  
諸田葬祭総合ギフト  
代表取締役社長  
諸田 豊一  
もろた とよじ

ことで全国的に家族葬が主流になりつつありますが、群馬では葬儀の変化はあまりありませんか？

**林** 群馬の葬儀を振り返ると、この20年くらいで随分と変わりました。そして、また、この5年くらいで葬儀のスタイルが変わりつつあります。

**昔は、群馬と言えは関東平野を耕す農家が主体で葬儀も自宅で行う自宅葬がほとんどでした。それが、20年くらい前に大手葬儀会社が葬儀専用ホールを設立されて、ホール葬で行っても自宅葬と同じ値段でできるとPRし、軒並みホール葬が増えました。メモリードさんなどが展開して、また群馬の葬儀が変わりましたね。**

**羽曾部** 確かにそうでした。メモリードが設立した当時は、90%が自宅葬でした。本当にホール葬をやろうという施主が来るのだろうかとか心配しました。また、施主様がホール葬でと希望されて

も、隣組が葬儀は自宅葬がならわしだと反対されることが多く、半年間は葬儀が行われることが少なかったです。じわじわと増えていったのが、2、3年もたつと加速的にホール葬に変わりましたね。

**諸田** そうですね、ホールができて葬儀が変わりましたね。北毛地区は群馬のなかでは部落のつながりが強い集落が多いため、ホール葬に展開していくのは遅かったですが、じわじわと変わっていききました。

**柿沼** 伊勢崎市は公営斎場が2カ所あります。平成元年に公営斎場ができましたが、当時はホールを持っていない葬儀社が多く、それで二葬にホールを持つ葬儀会社の設立が多くなりました。その後、境美原にも公営斎場ができました。それにより、それまでの自宅葬から斎場でのホール葬へと変わっていききました。ホールを持つ葬儀社と、私どものようにホールを持たずにリーズナブルな価格で葬儀を



株式会社  
カキヤマ  
代表取締役社長  
柿沼 尚孝  
かきぬま なおたか



株式会社  
あわび交通  
代表取締役社長  
羽田 隆太  
あわびひろのび

行う葬儀社があります。

**赤石** 葬儀ホールの存在は知っていましたが、実際に群馬県にもいくつか建ちはじめると、あらためて葬儀形態の変化を複雑な気持ちで迎えたことを覚えていました。自宅葬からホール葬に移行するのはある種必然で、親戚、隣組さんへの気づかいなどの軽減が、経済面より優先されたことはひとつの理由だと思っています。それが、今の経済状況の中では、ホールでの家族葬というのも必然なのでしょう。葬家のニーズに応えるのが私たちの使命でもあるので、お客様の予算に合わせたホール葬をプランニングする必要性を感じています。

**清水** そうですね、やはり「家族葬」が増えてきております。それに、「通夜」をなくして「葬儀告別式」のみ行ってきた。なんて、言われるケースも出てきましたし、中には、火葬のみの「直葬」もあります。会場も今までのような大きなス

ペースではなく、小ホールの利用が増えてきました。ここ何年かで、だいぶ変わって来ましたが。

### 葬儀屋が葬儀を簡素化し、葬儀の異業種参入が増加

**林** ホール葬が地域に浸透し始め、葬儀社が出棺者、納棺者、アシスタントと専門分業で葬儀をしていることに異業者が着目をはじめました。「自宅に向き寄り付けをしなくていい」、専門スタッフさえいれば、どの業種が葬儀を執り行っても同じなのだ、異業種の企業が参入し、また葬儀業時代が変わりました。いわば、葬儀屋が葬儀を簡単にしてしまったとも言えるのです。

それに加えて、平成2年、これまでの霊柩運送業の事業が国の規制緩和によって、免許から認可事業になりました。それで、群馬県の霊柩車の数は3倍に増えました。

**羽田** 群馬県では集約化の方向で進んでおり、ならわしをよく知っている葬儀屋



株式会社  
赤石三光堂  
常務取締役  
赤石 光裕  
あかしみつひろ

かえって少なくてすむのです。

香典は互助の精神の表れで、「あいたい」といいます。

**清水** 今や、「家族葬」がキーワードのようになり葬儀自体がメジャーになりました。15年前は死に関する仕事への認知が低く、葬儀屋ですと正直言いがらかったです。あちこちにホールが建ち、映画「おくりびと」が注目され、葬儀に関する仕事や葬儀自体が少しずつ認知されてきました。

**赤石** 「家族葬」という言葉が先行して、葬儀後に大変な思いをして苦労している施主様もいらっしゃいますね。メリット、デメリットを明確に説明する役割が大切だと考えます。事前相談も浸透してきたので、私はその時に説明をするようにしています。

**林** 葬儀が注目を浴びるときは、世の中が不況のときが多いのです。葬儀の費用は明瞭になっているのだから、葬儀屋はわかりやすく説明する必要があります。家族葬でも一般葬でも、人員配置、葬儀の段取りや内容はほぼ同じです。家族葬だから内容を省略する、スタッフを減らすことはありませんで、「一般葬」の費用が高く、「家族葬」が安いとはひとつくりにはできないことを、案外知らない方が多いです。

弔問客が少ない故に香典金額も少ないので、施主様の負担額が大きくなるケースもあります。葬儀は「葬る祭り」と書くように、故人を尊重する儀式で故人をどう供養するかが大事なのではないでしょうか。

がその土地ごとに決まっていますね。ですから、異業種が執り行うのは難しかったのです。

**林** そうですね、まさに、農家を中心とした自宅葬が長年にわたり行われてきました。それが、この20年の間にどんどん葬儀スタイルが変わり、ホール葬が公営斎場と民間斎場で行う葬儀に分かれてきましたね。

**林** 地域のつながりがどれほど強かったかがわかる、悔しい思い出が幾つかあり、それがいまだに忘れられません。地域で葬祭ホールをいち早く造った、17、18年前の頃の話です。施主が事前相談にきて葬祭のお打ち合わせを致しました。そして、隣組のお手伝いの方に「私たちが葬儀の用意を致しますので、皆様はお手伝いをしていただくなくて大丈夫です」と説明をしたところ、近所の方がすごい剣幕で怒鳴ったのです。「手伝わなくていいとはどういうことだ」と。昔は、隣組で葬式の手伝いを朝から晩まで、2、3日間、仕事を休んで、みんなで手伝って葬式を出してました。隣組の絆が強く、「隣組が葬式を出してやる」という意識ですから、迫害されたような気持ちになられたのでしよう。隣組長が香典返しの商品を決めるくらいの時代でしたから。いわば、隣組主導型から業者型に移行した訳です。群馬県では現在は約200社の葬儀社があり、ホールが100以上あるというデータがあります。ホール葬義が中心となってきた事がこのデータからもわかります。

**諸田** 私の住まいは川の傍にあり、鹿が来るような地域です。昔ながらのならわしが残っている地域と都市化した街と二極化しています。葬儀の小規模化が進むなか、ホール化が進み、葬儀は親族の都合で楽な方向に向かってしまっているのではないかと、と思うことがあるのです。故人の気持ちが置き去りにされて、簡素化されてしまったのではないだろうか。

**林** 少規模で葬儀を行うことを希望するパターンが多くなってきています。50人くらいの葬儀が人気で、広いホールをパーティションで仕切ったりして対応することが増えています。

故人は社会や地元で様々な人と関わってきたはずで、それを告別する場を設け



株式会社  
えびし葬祭  
専務取締役  
清水 則昭  
しみずのりあき

## 緊急輸送活動で活躍する 全国霊柩自動車協会

活動力、行動力の  
いっそうの強化を目指す

阪神・淡路大震災で、緊急輸送活動に出向いた全国霊柩自動車協会。「マニュアルがなく、思うようにこの遺体の運搬輸送ができませんでした。その反省を基にマニュアル化して、それ以降は定期的に勉強会を行い、訓練なども行っています。」と話す理事長の林さん。さらに林さんは、「青年部会副部長清水さんなど若手達の取り組みは熱心で、研修会や勉強会を積み重ねながら、行動力活動力があります。群馬県は被害が少なかった果として、起こすべき行動を決めて推進しています」と話す。東日本大震災のときは献身的に東北に出向き、全国霊柩自動車協会は緊急輸送活動を行った老舗の葬儀会社だからこそ、故人の尊厳を守るために全国霊柩自動車協会として活動もできるのだという。



今は洋型霊柩車が主流となり、姿を見ることが少なくなってきた宮型霊柩車だが、今も大切な故人の最後を立派に送ってあげたいと希望する方もいる。写真は、今では希少となった木製の宮型霊柩車  
(写真提供：おにし堂)

### 全国霊柩自動車協会とは

霊柩運送業者は、貨物自動車運送業という法律に基づいて、国土交通大臣から許可を受けた業者だけが行うことができるライセンス事業。財団法人全国霊柩自動車協会は、昭和21年10月に任意団体として出発し、人間の死という尊厳性の確保が最も必要とされる場において、重要な役割を果たし、自然災害や交通災害の場において、犠牲者およびその家族への適切な対応を求められるという極めて公益性の高い、霊柩自動車運送業の団体として発足。昭和51年4月に運輸大臣から社団法人として許可を受け、平成24年4月より一般社団法人となる。事業の適正な運営および公正な競争を確保し、事業の健全な発展を促進し、公共の福祉を増進し、事業の社会的、経済的地位の向上を図ること目的として運営されている。